

ユマニタスの実験：「生涯居住型アパート」

ブルース・ダーリング 常田 益代*

The Humanitas Experiment : "Apartments for Life"

Bruce DARLING Masuyo TOKITA*

Abstract

This paper introduces the Rotterdam Humanitas Foundation's approach to housing the elderly, termed "Apartments for Life." Once the elderly move into one of these apartment he or she does not have to worry about having to move again. Of course, the occupant can continue living with his or her partner. Moreover, the apartments are furnished so that anyone can live in them regardless of his or her care needs. All care will be provided including 100% nursing care. Each resident is master of his or her own home and can determine his or her own care needs. The "use it or lose it" concept is a key concept of the Humanitas care philosophy. Independence is encouraged by having residents take responsibility for these own lives and their daily activities. The built environment supports resident independence and dignity.

Key words : Humanitas Foundation, apartments for life, sheltered housing

キーワード：ユマニタス基金、生涯居住型アパート、擁護住宅

はじめに

ロッテルダムに拠点を置くユマニタス基金では、北欧の福祉政策にオランダの合理性とビジネス感覚を組み合わせ、年金で過ごす高齢者にまとまった戸数の「生涯居住型アパート」を提供して注目を浴びている。創立者のハンス・ベッカー氏が、代表責任者である。この調査報告書では、ユマニタスの生涯居住型アパートへの取り組みを紹介する。

オランダの諺に「古い木は動かすな」というのがあるそうだ。思い出や個々の生活様式をつまんだ住居(home)から高齢者を何度も切り離してしまうと、その人を支えていた根も弱ってしまうということだろう。高齢期を迎えてから死にいたるまでの間に「移動」を余儀なくされると「施設を移る度に医療的機関要素が強

目立つようになり、その分、高齢者の混乱や物忘れ、寂寥感、無力感が募ることになる。」¹

ユマニタス基金が編み出し、着々と展開しているのが「同一住居で生涯ケア」(Lifetime care in one location)すなわち「継続ケア付き永住型高齢者集合住宅」である。名称のとおり、ユマニタス基金は集合住宅と在宅ケア(ホームケア)、そして看護と治療を提供する非営利組織NPOである。ユマニタスでは、高齢者の健康やケアは高齢者自身ができるだけ責任を持つことになっている。住居費とヘルスケア費がきちんと区別されているのはこのためである。とは言え、オランダには退職後の生活や健康保険をサポートする社会福祉制度があるので、すべての費用はこれでまかなわれている。²

ユマニタスが運営する集合住宅(アパート)とナーシング・ホームには、2004年の時点で約6000人の

九州保健福祉大学社会福祉学部東洋介護福祉学科教授 〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町1714-1

*北海道大学留学生センター教授 〒060-8508 北海道札幌市北区8条西8丁目

Department of Oriental Care Management, School of Social Welfare, Kyushu University of Health and Welfare, 1714-1 Yoshino-cho, Nobeoka, Miyazaki 882-8508

*Hokkaido University International Student Center

North 8, West 8, Sapporo, Japan 060-0808

高齢者が住み、2100人が働いている。そしてボランティアの数が900人にのぼる。³ アメリカでも、同様の考え方にもとづく継続ケア退職者コミュニティ(Continuing Care Retirement Communities: CCRCs)が人気を集めている。英国等では、擁護住宅(sheltered housing)の整備が進められている。

このような生涯居住型アパートは、もともと退職後の年金生活者のために賃貸、あるいは買い取り型住宅として考案されたものだ。ユマニタスの複合型アパートが好評で人気を集めているので、今ではより裕福な層の人たちもこうしたアパートを購入したり借りたりしている。ユマニタスはオランダでの成功例だが、高齢化が進む日本でもこのような高齢者住宅への取り組み方は参考になると思う。日本にも、ユマニタスのやり方をそっくり真似る必要はないが、日本の高齢者のQOL改善につながるようなものが、そこから何か学び取れるはずである。

ユマニタス基金 Humanitas Foundation: その概略

1959年に設立されて以来、ユマニタスはケアの領域の拡大を目指している。高齢者の生活の質は、創設時から徐々に変わってきた。中でも、高齢者の住環境の改善はめざましい。ユマニタスの考えも変わった。オランダの高齢者の住環境の変遷については、ユマニタスの詳しい紹介である*Humanitas in een notend*を参照して欲しい。⁴ この問題の解決策として、ユマニタス基金では「生涯居住型アパート」(levensloopbestendige woning)を提供した。これは老人ホームや病院でのケアを含むあらゆるタイプのケアを、自宅で受けられるようにしたものだ。あくまで各人の要求に応える形のケアである。高齢者が必要としているものは何かを見極め、彼らの立場に立って必要なケアを決める。当然ながら、高齢者は施設に入るのを嫌がる傾向がある。病院、特別養護老人ホーム、老人福祉施設のようなケア施設には、関わりたくないと願う。できるだけ避けて通りたいし、入居などもってのほかだと考えている。とは言え、心身の機能が低下すれば施設入居もやむを得ないというのが、これまでの通念だった。心身の状態に応じたケア施設が、どうしても必要になる。オランダにおける老人福祉施設やナーシングホーム、病院は、まさにこうした施設なのである。

1995年12月に初めて生涯居住型アパートを300戸分(数年後には1000戸になる。また新たに10棟を増設)オープンして以来、ここでのユマニタスの理念に沿った試みは、今日の高齢者の要望に答えたものと

なっている。特別養護老人ホームと100パーセント同質のケアの提供も、実現出来るようになった。例えばアルツハイマー病患者でも、病気の初期段階で入居すれば、この環境の中で自立した生活が送れる。ユマニタスのアパートでは、不必要なケアは与えない。ましてや、患者に難癖をつけ恩着せがましいケアを行うことは、決してない。このことは、高齢者が自信や自尊心を高め、満ち足りた高齢期を過ごすのに役立っている。

ユマニタス基金の代表責任者、ハンス・ベッカー氏の信条は「人生は最後まで楽しむもの」である。ここから、「人間の自由を最後まで最大限尊重する」というモットーが生まれた。ユマニタス基金の運営する集合住宅は、細かな規則で住人を縛るものではない。ここで働くスタッフは、その特徴を「肯定文化、Yes Culture」と表現する。終の住処として設計されたこの集合住宅は、余生を楽しみ、己の生を全うする所だ。『ユマニタス要覧』には、ベッカー氏のもう一つの言葉が記されている。

「高齢者に本当の『福祉』、すなわち幸福(well-being)をもたらすものは、看護師よりもペット、栄養士よりもバーのマスター、衛生第一主義の環境よりも潤いある芸術的な環境である、とユマニタスでは見えています。このことを常に念頭に置いて、活動しています。」⁵

このような人に優しい環境には、年齢と恋愛は関係ないという考えが反映されている。この信条が運営にもケアの理念にも建築環境にも活かされている。

ユマニタスの運営方針

ベッカの「運営方針覚書」⁶によると、顧客主体のサービス業では組織の総体的なあり方が成功の鍵を握るという。ユマニタスの事業環境を形成しているのは以下の運営方針である。

1. 序列づけ、規則、報告書作成、会議、式典等は最小限に抑える。色つよい体制は職場環境、生活環境を損なうだけで何の益もない。
2. スタッフと入居者が対等な立場で何でも自由に話し合える関係を築く。ここでいうスタッフには、家族、友人からボランティアまですべてのケア供給者が含まれる。
3. 指示したり支配したりするのではなく、「歩き回り言葉を交わす」ことでスタッフと入居者が互いに支え合い意欲的になるような運営をする。

4. スタッフと入居者が創造性を発揮できるように奨励する。適切な助言を与えるために必要な専門知識は、個人の体験を通して得られるのだということを肝に銘じて取り組む。新しい考えは直ちに試してみても、もうまくいくようなら幅広く採り入れる。この取り組み方が運営の中核をなす。
5. スタッフと入居者の自立を最大限に支援することで最大の福祉を提供する。ただし入居者にどうしても自立が無理な場合は、必要なケア（看護を含む）のすべてを保障する。⁷

ユマニタスのケア理念

生涯居住型アパートでは、出来るだけ自分のことは自分でするよう奨励して、高齢者が自立した生活を送れる環境作りが心にかけている。居住者はもはや転居を言い渡される心配がないので、社会とのつながりを断たずに済む。脱施設化、個人の活動、近隣地域との交流も、この傾向を後押しする。夫婦は一緒に過ごし、ケアの大部分は自分自身と配偶者、そして親戚やボランティアから受ける。住人は、自立、要ケア、要看護の3つのグループに分けられる。しかし、ケアの必要度による差別化はせず、ケアを必要とする人と自立している人が同じ階に住む。高齢者がいつまでも社会の一員でありつづけられるように、地域住民やグループとの交流を重視する。バー、レストラン、美容院など地域の人にも開放する。多様性を大切にし、職業や、収入、健康の程度、年齢、出身地にかかわらず誰でも受け入れる。特養と同じケアが自分の自宅で受けられるようにする。それでも、家庭生活とケアはきちんと区別して考える。患者はあくまで、家庭においては主人なのである。各種の体操やリハビリテーションのプログラムも、住人の自由と自立を支えている。もちろん地域住民の参加も歓迎する。

生涯居住型アパートの敷地内に設けた「擁護住宅」、各人に合わせたケアや「身体は使わないと駄目になる」という方針、その他の刺激等で、高齢者は出来るだけ健康維持、さらには健康増進にすら努めるようになる。過度のケアは、ケア不足よりもマイナスなのである（「ケアは必要最小限に」）。ケアは数人のケア供給者が受け持つが、こうした人々の調整も大切な仕事だ。提供されるケアについては、ケア契約の中できちんと規定しておく必要がある。ケアに関する全要望を受けつける窓口を設け、常勤のケア・マネージャーがそれぞれの要望に対処できるよう手配する。ケア契約を作成するときは、依頼人である高齢者がケアの量、内容、時間等を決めること

が出来る。このような形で、高齢者自身が自分の生活の主導権を握り続ける。あくまで、高齢者の自己管理が政策の中心になる。ケアプランの作成は各住人に任せられているため、ケアに掛かる費用もまちまちである。

あくまで各人のニーズに合わせて考えられたケアは、お仕着せのものとは異なる。今や各人のケアは、職員ではなくケアを受ける側が責任を持つ。職員の役割は、住人に自分のケアは自分で責任を持つように指導することであり、住人のために何もかもしてあげることではない（「手は出さずに手を貸そう」）。これを達成するには、職員側にも住人側にも、今までよりもっと柔軟な姿勢が求められる。ユマニタスが試験的に行った、全面的なケアから必要に応じたケアへの移行報告書によると、一部の職員よりも高齢者の方が新しいケア方式に慣れるのが早かったようである。⁸

適切なアクセシビリティと総合機能を備えた施設は、外部の人たちを惹きつける。外部者が敷地内にいることで、住人も活気づき意欲的に行動することになる。地域社会の人たちのこうした訪問で、住人と外部社会に交流が生まれる。それがなければ、病院と変わらなくなってしまおうおそれがある。⁹

テクノロジーの役割

テクノロジーの進歩に応じて新しい機器が簡単に取り付けられるつくりになっている点も、住人の自立と安全に役立っている。緊急時に、事務所につながる警報・連絡システムがその例である。数年前からユマニタスは、個人やホームのテレケア（遠隔治療）相談応答センターシステムでは世界のトップにあるタンストール・グループ（Tunstall Group）と提携している。ユマニタスの建物のほとんどにタンストールの警報連絡装置がつけられている。またユマニタスの生涯居住型アパートには、パイパーネットワーク制御とつないだタンストール・ケア管理システム（ライフライン3000ホームユニット）のような、24時間型テレケアモニターがついている。このような24時間型テレケアモニター・コンピュータ登録システムがあれば、ケアプランと実際に受けたケアを比較、監視することが可能になる。ユマニタスがこのシステムをどこまで活用しているかは、不明である。タンストール・グループではテレケア・オーバーレイというシステムも開発している。これは遠隔地の弱者を見まもるシステムで、たとえばベッドについているか、転落していないかが監視できる。こんなシステムがあれば、住人も介護者も安心して生活できる。もちろん、いつもデレ

ケア・オーバーレイで監視されているのは、プライバシーの侵害にならないかとの心配もある。

生活の場の建築環境

このユマニタスの信条が建築環境にも反映されている。たとえば、ベッカー氏は建築家に注文を出す時、「なんでも好きのよう設計してよい。ただし四角い箱はダメ。高齢者が楽しめる混沌とした空間を創ること」と言うんだ。と冗談めかして語った。もちろんこれは誇張で、現実には予算があり、建築基準法、消防法、開業認可規定等もろもろの法規の課す条件をクリアしなければならないわけだが、氏の言わんとするところはよく伝わってくる。つまりユマニタスの集合住宅はコンピュータ・グラフィックの画像にみる幾何学形を組み合わせた無菌状態の世界ではない。予算枠の中で、年金生活者が気持ちよく暮らせる環境作りを目ざしている。

共有空間

筆者がユマニタスに興味をもつようになったのは、人に優しい生活環境の写真を見たのがきっかけだった。(写真#1) これこそ、ロッテルダムに本拠を置くユマ



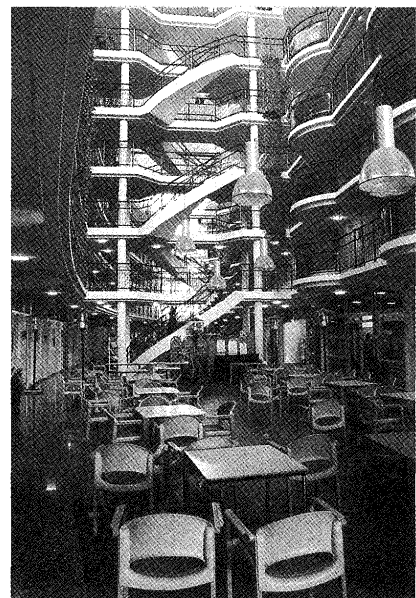
写真#1. ユマニタス・ベルグウェーグの二階にある吹き抜けの大アトリウム

ニタス基金(Humanitas Foundation)の運営する生涯居住型高齢者アパート・プロジェクトの一つ、ユマニタス・ベルグウェーグ (Humanitas-Bergweg) の写真だったのである。ユマニタス・ベルグウェーグを特徴づけているのは、二階にある共有部分の核となる吹き抜けの大アトリウムである。その頂にガラスの天井がかかり、刻々と変わる空の色を伝えている。青い空に白い雲が流れる日、アトリウムは光に満ち、豊かな緑と季節の花々

がいっそう鮮やかだ。横長の「鯉の池」もある。アトリウムの大空間と一体となった開放的なバーやレストラン、その先には美容・理髪店にインターネットカフェやあずまやが並ぶ。高齢者のための諸活動に使う多目的室もある。リハビリ室、デイケアセンター、外来患者診療所は一階にある。二階のレストランでは住人と近隣地域の人たちが楽しそうに食事をしながら話に興じている。集合住宅の共有空間というより、むしろ小さな街路といった方がいい。ここでは世代を超えて、住人と近隣住民と一緒にレストランで食事をすることができる。さらに創作活動センターも組み込み、複合文化施設のさらなる可能性さえ予感させる。

ベルグヴェーグのもう一つの特徴は、一階が充実したスーパーマーケットになっていることで、高齢者も地域住民もここで買い物をすることができる。スーパーマーケットの入り口の横にエスカレーターがあり、そのまま上がると二階のアトリウムに出る。公共の出会い空間として、アトリウムの活用度を高めるうまい仕掛けである。スーパーマーケットという日常的に訪れる場所と高齢者集合住宅を組み合わせることで、親戚や知人を訪問しやすくなる。アトリウムは、1995年に創設されたこの先進的な生涯居住型アパートの中核を成している。

ユマニタスの高齢者集合住宅の各建物には、それぞれ特徴がある。たとえば、ユマニタス基金の本部があるユマニタス・アクロポリス(Humanitas Acropolis)は規模が大きく、アトリウムの天井は最も高いし、採算面でも大いに配慮した設計になっているが、それでいて退屈しない温かみのある空間を成している。(写真#2) 人生



写真#2. ユマニタス・アクロポリスの規模の大きいアトリウム

を楽しむという信条どおり、そこにはバーがあり、ワインの飲める250席のレストランがあり、音楽室があり、アルツハイマー病患者のデイケアセンターがある。インテリアデザインの仕上げとして、あらゆる壁や空間に、ベッカー氏がアフリカや東南アジアで蒐集した彫刻をはじめ、油絵やテキスタイルが飾られている。ベッカー氏の個性溢れる空間だ。玄関ホールに並べられた数々のアンティークの車椅子のコレクションは、人はいつの世もそれぞれの文化的社会的環境の中で加齢していくことを静かに物語っている。

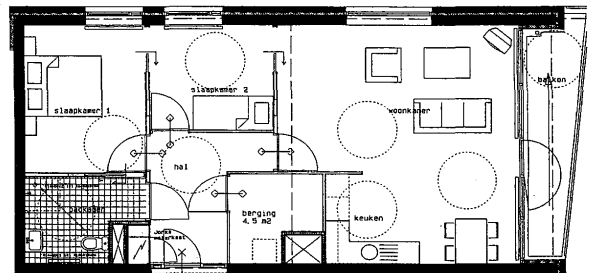
ユマニタス・デルーヴェンホック(Humanitas-De Leeuwenhoek)は、それより古い建物を改築したものである。一階にはラウンジとバーがあって、それに繋がる美術室から中庭に出ることができる。(写真#3) ガラス屋根のアトリウム代わりに、花と緑でいっぱいの空間がある。このアパートは駅の近くにあり、あまり安全な場所とは言えないので、中庭への出入りは建物内からのみとなる。



写真#3. ユマニタス・デルーヴェンホックの一階にあるラウンジとバー

各住戸の住居空間

ユマニタスの理念を実現するためには、生涯居住型アパート(“apartment for life”)の設計が重要になる。それを具体的に反映したのがユマニタス仕様だ。各アパート(住戸)は3部屋から成る。けっして広いわけではない(例：ユマニタス・ベルグウェーグのアパートの戸床面積：75m²)が、デザインの力量が発揮されている。(写真#4) 各住戸の玄関の扉は車椅子やストレッチャーが通れる幅にし、車椅子やストレッチャーが使いやすい回遊式の平面で、バスルームの掴み棒と移動可能のシャワー椅子、台所の調節可能なカウンターなどが標



写真#4. ユマニタス・ベルグウェーグの生涯居住型アパートの平面図

準仕様としてつけてある。自炊するなり、出前を頼むなり、外食するなり、住人の希望次第である。また、ユマニタス・デルーヴェンホック(Humanitas De Leeuwenhoek)の各住戸の入口の扉は上下に二分されたもの(いわゆるダッチドアDutch door)で、上半分だけ開けることもできる。部屋にいる時、扉の上半分を開いておけば、孤独感に悩まされることなくプライバシーも保つことができる。ユマニタス・アクロポリスのアパートは、ユマニタス・デルーヴェンホックより大きい。外気が十分とれるように、ベランダにはテーブルと椅子を置くスペースがある。いずれにしても、共有空間のアトリウムに行く時は、ちょっとした外出気分だ。

このような工夫によって、人間尊重の考えにもとづくユマニタスの新しい生涯居住型アパートは経営的にも大成功をもたらして着々と建設が続いているが、それでも数千の人が順番を待っているほどだ。

建物と庭園のデザイン

ユマニタス・アクロポリスの建物で最も驚かされるのは、前述のガラス張り天井の吹き抜けアトリウムだ。この広々とした気持ちのよい大空間は、居住者や近隣住民の「タウンセンター」的な役割をもっていることだ。現代的なデザインの五階のアトリウムが、地上階のレストランのテーブルのはるか頭上に突き出している構成は非常に印象的だ。屋外の造形庭園には小さな池の周囲に木立や茂みが設けてあり、散歩が楽しめる工夫してある。

これに対し、ユマニタス・ベルグウェーグの二階に位置するアトリウムはより伝統的なデザインであるが、アトリウム空間内を走る52フィートの池には鯉が遊泳し、そこを中心に設けられた小さな日本庭園とその植え込みや石灯籠のしつらえは心を和ませてくれる。ガラス屋根を通して自然光が降り注ぐので、さまざまな植木や草花がいきいきと育っている。

一方、ユマニタス・デルーヴェンホックは街中にあるだけに、落ち着いた開放空間が求められる。美術室から続いたこの中庭は特に広いわけではないが、実際ここに入ると、都会の喧噪を忘れてしまうほどだ。青空の下、車椅子の住人への配慮がなされた庭づくりや小さな池、茂った木々や植え込みをみると、ゆっくり寛いだ気分になる。中庭に隣接する建物の窓枠は深味のある赤で、緑の樹木によく映えるアクセント色になっている（写真#5）。



写真#5. ユマニタス・デルーヴェンホックの小さな池、茂った木々をみる中庭

芸術のある空間

ユマニタス基金が経営する集合住宅は建築の規模の大小に関わらず、内部は玄関にはじまり、ホールでも食堂でも、また休憩室、美術室、アトリウムでも、壁には必ず、絵画や、彫刻、タペストリー、仮面、写真等が飾られている。作品の数が多いので、まるで画廊にいるようだ。「衛生第一主義の環境よりも潤いある芸術的な環境を」という考え方が実践されていることがわかる。ユマニタス・アクロポリスを訪れるとまず目に入るのは、玄関ホール周辺に展示してあるアンティーク車椅子の数々だ（写真#6）。ゲストとして招かれた芸術家や住人の作品も、定期的に壁に展示される。

各住戸の玄関や内部は、それぞれの住人の好みで四季折々に飾り付けがなされる。住人は前に住んでいた家から家具や室内装飾品を持ち込んで、新しい住まいをできるだけ自分らしい心地よい住処にすることができる。持ち込みの調度品にはかけがえのない思い出の数々がまつまっているのは言うまでもない。

芸術プログラム

ユマニタスの生涯型アパート群の中でも最も古く小規



写真#6. ユマニタス・アクロポリスの玄関ホールにあるアンティーク車椅子展

模のユマニタス・デルーヴェンホックは、箱ものの建築としては、一見、特記すべきことはないように見えた。しかし、玄関ホールからラウンジ、そしてラウンジから美術室、中庭へとつづく空間は効果的に活用されていた。ラウンジにあるピアノを囲む人たち、カード遊びをする人達、編み物をしながらおしゃべりをするグループなど。こうした寛いだ雰囲気の中庭に隣接している美術室はガラス張りだから、美術室の活動もその奥の緑の中庭もラウンジからよく見える。ラウンジには住人の作品が展示されている。また中庭にでるには美術室を通り抜けるから、そこにある画材や作品に目がいく。庭に面した大きな窓のある、ほどよい広さの美術室は明るく楽しい（写真#7）。



写真#7. ユマニタス・デルーヴェンホックの中庭に面している美術室

この芸術プログラムは週に2回、講師が来て、興味のある住人に絵画を教えるというものだ。たったそれだけのことのようにだが、住人の作品をみると、型にはまった作品ではなく、どれも伸びやかで素晴らしい。このプログラムの人気の高さが分かる。作品は個人のものも共

同制作のものもあり、完成すると隣接するラウンジの展示スペースに並べられる。

ユマニタス・ベルグとユマニタス・アクロポリスにも、希望者に音楽や絵画の講習を行う部屋が一階に用意してあった。アルツハイマー病の患者用に特別に作られた絵画や音楽のプログラムもあった。(具体的にどんなプログラム?)

終わりに

ユマニタスの「生涯居住型アパート」という概念は、日本の文化にも適用できるだろうか。ユマニタス財団の本部があるロッテルダムで運営されている「生涯型アパート」は、これまでのところ成功している。ここには世界各国から学者や研究者、保健福祉の関係者、個人で高齢者の住環境作りに取り組んでいる人達など多くの人が視察に来る。アメリカの研究者は、このユマニタスの試みをヨーロッパ型のケア付き住宅の一例と見なす。アメリカの多くのケア付き住宅と違い、ユマニタスの住人は自分の住居からヘルスケア施設に移る必要がない。自宅で必要なケアをすべて受けることができるようにするのが、ユマニタスの目的である。買い物や食事ができ、ヘルスケアやリハビリのサービスが受けられる場所が近隣地域にまとまっている高齢者用の複合住宅は、北ヨーロッパでも増えつつある。ユマニタスの試みは、イギリスの擁護住宅運動と肩を並べる。スコットランドやオーストラリアの団体も、ユマニタスの高齢者用住宅への取り組みに関心を寄せている。今のところ、日本では、ユマニタス財団の「生涯型住宅」プロジェクトは余り知られていないが、日本でもユマニタスの取り組みから得るところが多いと確信している。

- 1 ダーリング・ブルース「アメリカにおける高齢者の居住環境の選択肢」『社会福祉の動向と課題』西尾祐吾・塚口編著 中央法規2001年、pp. 307-8.
- 2 Mike Edwards, "As Good as It Gets," AARP The Magazine, November/December 2004, pp. 45-51,74-75.

このAARP誌の記事には、安心して加齢できる国々についての具体的な調査結果が紹介されている。筆頭はオランダで、15歳から64歳の間にこの国に居住していた人は誰でも、65歳になると老齢年金を受けることができる。職歴は一切問われない。独身者には月額約\$1,000が、夫婦(入籍の有無を問わず)には\$1,400が支給される。たとえば、元教師とその妻は国と職場のそれぞれから年金を受けられるので、足し合わせると年額およそ\$45,000になり、さらに\$700の休暇手当がつく。これにはそれなりの代償も求められる。個人所得税は52%という高さで、さらに一般年金基金(AOW)や健康保険(AWBZ)のための税がある。その他、付加価値税(VAT)や、食品や車両等にかかる税もある。

- 3 Marcel van Marwijk and Hans M. Becker, "The Hidden Hand of Cultural Governance: The Transformation Process of Humanitas, a Community-driven Organization Providing Cure, Care, Housing and Well-being to Elderly People," *Journal of Business Ethics* 55: 2004, pp. 205-214
- 4 ユマニタスの詳しい紹介はハンス・ベッカ、『ユマニタス要覧』(Hans Becker, *Humanitas in een notendop*, Humanitas Press, Rotterdam, August 2000)を参照;または Quintis Woonzinnig website, <http://www.woonzinnig.nl/index.php3>を参照。
- 5 同上
- 6 ハンス・ベッカ、「運営方針覚書」1999年、p. 18.
- 7 ハンス・ベッカ、ピーター・デ・ランゲ「高齢者対象事業の人道主義的ルーツ」より抜粋 *Humanistiek nr. 10, 5e jaargang juni 2002*, pp 55-56.
Hans Becker and Peter Lange, "Humanist Roots of Entrepreneurship for Older People," *Humanistiek nr. 10, 5e jaargang juni 2002*, pp 55-56.
- 8 Angus Council Report No 782-000, p. 4 . (url:<http://www.angus.gov.uk/ccmeetings/Reports/housing/hou2000/782.pdf>.)
- 9 『ユマニタス要覧』を参照。